

## バスケットボール映画に見る黒人差別表現とその影響

### The representations and influences of racial discrimination against black people on the basketball movies

1K04A183

橋本 万葉

指導教員

主査 宮内孝知先生

副査 石井昌幸先生

#### 目的

筆者は大学3年生の夏から1年間、アメリカ合衆国に留学をした。そこで筆者は、初めて色々な人種の人々が暮らす国で生活し、そして、「自由の国」と謳われているアメリカ合衆国で、「人種差別」は今日でも存在していることを知った。留学中に受けた講義には、必ずと言って良い程「差別」についての授業があった。そこで筆者は、留学中に「スポーツ社会学」と「映画論入門」という授業の中で勉強したことを元に、「人種差別」をテーマにしたスポーツ映画が、「なぜ、そう描かれるべきであったのか」、そして、「観客にどのような影響を与える可能性があるのか」ということを明らかにしたい。それが、本論の目的である。

#### 方法

第1章では、「人種差別」について論じる上で理解が必要になる用語について確認の意も含めて定義し、アメリカ合衆国における黒人差別の歴史と、スポーツ界での人種差別の歴史・実態について簡単に解説する。第2章では、この論文で扱う3本のバスケットボール映画のあらすじ、制作スタッフや出演者の民族背景、興行収入、受賞、映画の時代・舞台設定について解説する。第3章では、3本の映画の脚本の書かれ方や、バスケットボール・シーンの描き方にどんな共通点・相違点があるのかを比較する。第4章では、これらの映画がなぜそう描かれるべきで、それによってどんな影響を観客に与えるのかについて論じる。

#### 結果・考察

この論文では、3本のバスケットボール映画を扱った。「人種差別」をテーマにして、白人監督・プロデューサーによってハリウッドで制作された『グローリー・ロード』、田舎の白人高校バスケットボールチームが優勝するまでを追った、白人バスケットボール映画『勝利への旅立ち』、そして黒人監督スパイク・リーによって制作され、黒人親子の絆を描いた『ラストゲーム』の3本である。

まず、これら3本の映画が、「3アクト・ストラクチャー」と呼ばれるハリウッド式の脚本に当てはまるかを検証した。この「3アクト・ストラクチャー」は、「2時間という短い時間の中で、観客を一時たりとも退屈させないように」ほとんどのハリウッド映画が採用しているフォーマットである。ハリウッドで白人によって制作された『グローリー・ロード』と『勝利への旅立ち』はこれに当てはまったが、黒人監督によって制作された『ラストゲーム』は当てはまらなかった。

次に、3つの映画で共通している“今住んでいる町を出て行く”という表現について比較した。白人のみが住む田舎町が舞台の『勝利への旅立ち』では、「バスケの英雄」になることは、町の中で神様扱いされることであり、そのためにこの町の中に閉じ込められることを意味した。一方で、ニューヨークの低所得者団地に住む黒人が主人公の『ラストゲーム』では、「バスケの英雄」になることが、「ここを出て行く唯一の方法」だとされていた。このように、アメリカ人なら誰もが夢見る「アメリカン・ドリーム」を叶えるために、黒人にとってバスケットボールは良い手段であったが、白人にとってはそうではないのである。

そして最後に、3本の映画に共通してクライマックスで使用されているバスケットボール・シーンについて比較した。『勝利への旅立ち』では、身体優位説のある黒人選手に、白人選手が打ち勝つ様子が、『グローリー・ロード』では、黒人選手たちが試合を通して「人種差別」に対する怒りをぶ

つける様子が、『ラストゲーム』では、親子の1on1を通してこの親子が過去を乗り越える様子が描かれていた。つまり、3本の映画すべてが、最後のバスケットボール・シーンを通して、映画全体において主人公たちの「敵」となっていたものと戦っていたのである。